

中国陶磁の文様技法について

中国陶磁はさまざまな方法で器面に装飾が施されていますが、その文様は器形・釉色などと共に鑑賞上の大事なポイントです。

その装飾模様は技法上から、絵画文様・彫刻文様・型押文様・貼付文様及びこれらを併用したものなどに大別する事が出来ます。

①絵画文様は「画花」と総称されますが、これは上絵・下絵及びその両方を用いたものの三種類の絵付技法によるものです。

下絵には青花・釉裏紅・鎊花などがあり、いずれも釉下着彩の顔料を還元焰焼成で発色させたものです。

数年前、ロンドンで開かれたある有名な美術品競売で東京の古美術商が元時代の壺を前代未聞の高値で落札して、大きな話題となりましたが、この壺は貼付文様に青花と釉裏紅で彩った美しい貴重な作品です。

上絵は本焼きしたあとの釉上に上絵具や金泥などで着彩し、それを低熱で焼付けたものです。赤絵・色絵・五彩などと呼ばれており、下絵を施してから更に上絵付をしたものも同じ名称と呼ばれております。

②彫刻文様には、「刻花」と呼

ばれる釘彫り状の線刻文様、「雕(彫)花」と呼ばれる平彫り・凸彫り・凹彫り文様、「掻落し」と呼ばれる化粧土の削り取り文様、透彫り文様などがあります。また金襴手などに用いられている上絵の彩色に針で描線を加えた針彫りは一種の線刻ですし、「法花」は一種の凸彫りで、その凹部を数種の色釉で厚く塗り分けたものです。

③型押文様は「印花」と総称され、これは成形後まだ素地が軟かいうちに、模様を彫刻した型を器面に強く圧して、押印文を施す方法です。彫刻よりは技術が簡単ですので、量産に適しています。

④貼付文様は「貼花」などといわれていますが、これはあらかじめ鑄込み又は手起こしなどによって作られた素地片を器表に貼りつけ、その上から釉掛けしたものです。青磁で牡丹唐草などの浮起文様がある「浮牡丹手」、紐状の素地を何本か貼付けてから黒釉などを施した磁州窯の「白堆線文」などがこれに該当します。また袋にいった泥漿を嘴口から押出して、高盛りの線をつける「イッチン盛り」や呉須手の「餅花手」、あるいは模様にかつた金箔を貼付けて、低温で焼付けた「金花」なども一種の貼付文様と云えましょう。

中国陶磁にはこの他にも多くの複雑な装飾技法がありますが、そこには染織・漆工・金工・玉牙細工などのすぐれた伝統技術が応用されており、興味深いものがあります。やきものを芸術にまで高め、今日世界に冠たる地位を占めているのも、実にこうした無名の陶工達による人智を尽くした創意と工夫の長い歴史があるからです。



青白磁貼花牡丹唐草文壺 元時代